

へき地・小規模校の学級集団づくりの観点と社会性・自立性の育成

玉井 康之
(北海道教育大学 副学長)

Perspectives on creating class groups in remote small schools and facilitating sociability and independence

Yasuyuki TAMAI

(Hokkaido University of Education)

課題と方法—へき地・小規模校の自立的な学級集団づくりの課題

学級集団づくりは、集団としての学級がより良い学習集団・生活集団に発展していくための教師の組織的・計画的な教育活動である。その活動範囲は極めて広い内容を含んでおり、様々な教師から子ども達への働きかけが不可欠となる。この学級経営の理念や目標は、大規模校もへき地・小規模校も同じで、基本的な学級経営の取組の方向性は異なるわけではない。しかしへき地・小規模校では、少人数のために、集団としての学級経営がそもそも成立しないとみなされたり、子ども間も馴れ合いになって集団づくりができず、社会性が育たないとみなされたりする。また教師と子どもの関係性も強いために、教師への依存性が強く、自立性が育たないとみなされることも多い。

しかし大集団も小集団も本来的に目指すべき学級経営の目標や活動が共通するのであれば、大集団の積極面を意識的にへき地・小規模校の集団づくりに取り入れることで、社会性・自立性も高まるとみなすことができる。へき地・小規模校では社会性・自立性が育たないという言説の中で、本稿では、へき地・小規模校の学級において、とりわけ社会性・自立性を発展させる学級集団づくりの観点をとらえたい。

へき地・小規模校では、少人数の関係を基盤にして、人間関係や信頼関係は自然に強固な関係になる場合が多く、また多様な個性・異能力を持つ子どもを包摂する受容性も高い。

一方少人数のため、しばしば子ども間の馴れ合いや教師への依存傾向とその克服の必要性も指摘される。極小規模学級では馴れ合いや依存性を不可避と考えるのではなく、子ども間及び子どもと教師間の人間関係・信頼関係を強めながら、同時に馴れ合いや依存性を克服する基本的な指導方法が必要である。すなわちへき地・小規模校では、一般的な学級集団づくりに加えて、意識的に社会性・自立性を

高める学級集団づくりを進めていく必要がある。実践的には多様な方法があるが、ここでは、へき地・小規模校で重視すべき社会性・自立性を高める観点をとらえる。

へき地・小規模校の学級集団づくりの研究は、そもそも極小規模であるため、集団を形成できないとみなされ、集団づくりの研究対象として取りあげられることは少なく、へき地校の学級経営を取りあげた単著書もほとんどない。深見著『単学級担任・複式学級担任の学級経営—へき地・小規模校での実践事例を中心に』は、その数少ない学級経営の一つであり(注1)、深見氏は複式学級担任の子どもたちの社会性・自立性等の指導課題意識をアンケート調査で明らかにした。また全国へき地教育研究連盟編『効率的な学習指導と学校・学級経営—へき地・小規模・複式学級を有する学校の実践的事例』(注2)では、ガイド学習・リーダー学習を中心とした学級経営の先進事例を集約している。ガイド学習は、教師が不在でも、学習における自立性を高める活動である。

これらを踏まえて、一般的に指摘されるへき地・小規模校の社会性・自立性の向上や、馴れ合いや依存性の克服のためには、意識的に社会性・自立性を高める学級集団づくりの指導が不可欠である。留意すべき極小規模学級の指導方法を前提にすることで、へき地・小規模校の課題を克服し、利点を生かすことができる。へき地・小規模校では小規模の特有の人間関係をプラスに活かしつつ、小規模性を克服する学級集団づくりのあり方が重要となる。

へき地・小規模校の馴れ合いを克服し、社会性・自立性を育成する学級集団づくりのためには、次の5つの学級内の意思疎通と活動を高める観点が重要になる。まず、1)のコミュニケーション機会の拡充、および2)の討論方法の共有は、集団の意思疎通を高める条件となる。3)の学級内の役割分担の明確化と4)の学級ルールづくりは、集団の行動規範を高める条件となる。5)の縦割り班活動は、へき地校に典型的な活動で、縦組織のリーダー性・フォロワー性を高める条件となる。

社会性・自立性を育成する学級集団づくりの観点

- 1) コミュニケーション機会の拡充：少人数の単純接触効果を積極的に活かしフォーマルコミュニケーション機会を拡充することでコミュニケーション力を育成すること
- 2) 討論方法の共有：異論・提案を含めた討論方法を共有するとともに運用方法においては柔軟な活用を図ること
- 3) 役割分担の明確化：学級の活動の役割分担・責任者の明確化を図り相互補完関係を伸張させること
- 4) ルールづくり：学級・班・全校委員会等の組織活動・集団活動の中でルールづくりと活動目標を作成させること
- 5) 縦割り班活動の促進：異学年・異世代間の縦割り協働活動の利点を生かしリーダーシップ・フォロワーシップの意識づけを図ること

これら5つの学級集団づくりの関係は、まず学級内のコミュニケーション機会を拡充し、その討論方法を共有することが建設的な討論を行う条件となる。また活動においては、学級集団の役割分担の明確化、及びその集団活動のルールづくりで、組織的な活動を発展させ、皆が共通の方向性を意識して行動できる。さらにへき地校では、縦割り協働活動を促進することで、異年齢集団を活かした集団内のリーダーシップを育成できる。へき地・小規模校の学級集団づくりでは、子どもへの社会的役割付与・組織活動により、小規模でも社会性・自立性を育成できる。

1. コミュニケーション機会の拡充とコミュニケーション力の育成

(1) 少人数の単純接触効果の積極的活用とコミュニケーション力の向上

少人数の学級の人間関係では、顔が相互に見えて全員が参加できる活動を作りやすい。また相互の接触頻度が多いため単純接触効果が高く、性格や価値観の違いを超えて、信頼関係や互惠関係を作りやすい。単純接触効果とは、接触する頻度が高いほど、信頼感や好感度評価が高まるという心理効果である（注3）。とりわけ15人以下であれば、全員が役割を持ち発言したり、少人数を生かした活動も作りやすく、個々の個性・力量を超えて協働的な関係も作りやすい。すなわちへき地・小規模校では、相互の接触頻度が高いため、基本的に信頼関係が強固になる。

一方信頼関係が強固であることは、馴れ合いになることを目指すものではない。少人数の関係の中では、逆に何も働きかけなければ、馴れ合いになったり、特定の人に影響されたり、教師に依存してしまう関係が生まれる場合もある。馴れ合いの関係は、相互に高め合う関係にはならないため、信頼関係を高めながらも馴れ合い自体は克服するコミュニケーション力が重要になる。すなわち小規模の強固な人間

関係を良い側面としながら、馴れ合いにならないようなコミュニケーション力を育成することが重要になる。この点がへき地・小規模校の学級集団づくりの基盤として意識されなければならない。

(2) 異論・提案の承認及び合意・馴れ合いを区別するフォーマル機会の設定と切磋琢磨による相乗効果

少人数の中では一致しやすく、また子どもどうしても無意識に相互に一致することだけを良いこととしてしまい、友人間でも異なる発想を出す必要性を感じなくなる。教師も一致している状況に対して、あえて異なる意見を出させる必要性を感じなくなる。少人数の人間関係の中では、相互に調和しようとする意識は高いが、異論・反論・提案などを調整・合意する経験が少なくなる。

一方の大人数になるほど、相性・性格・価値観が合わない人や触れ合う機会が少ない人も多くなり、その中で人間関係が疎遠的で対立的な関係も多くなる。このような人間関係は子どもにとってマイナスであるが、へき地・小規模校の子どもたちも、大規模集団では疎遠な人間関係もあることを知っておく必要がある。

これらの密接な人間関係と疎遠な人間関係との両方の課題を克服するためには、馴れ合いと合意とを区別することが重要である。合意は、意見の違いを踏まえた上での調整のプロセスを含むからである。馴れ合いにならないようにするためには、TPO（Time Place Occasion）を意識したフォーマルな発言・発表が求められる機会を、授業・行事・学級活動等で増やすことが重要である。

子どもに対しては、建設的な異論・提案は相互に許されることを確認することが重要で、異論・提案も出せる雰囲気を作るためには、異論・提案を認める運営原則を確立することも重要である。すなわち信頼関係があれば、建設的な異論・提案は、許されることを確認し、「建設的な異論・提案もお互いに高め合うために出しあうことが大事だ」「異論・提案の内容も議論しよう」という原則を意識的に打ち出すことが求められる。

授業においても、教師は単元の正解・結論の一致や、集団関係づくりを目指すために、無意識に討論のプロセスを経ずに一致することを奨励してしまうが、異論・提案を調整する関係づくりを高めていくことが求められる。

(3) フォーマル機会の拡充とフォーマルなコミュニケーション力の育成

日常的な会話の中では、へき地校の少人数の関係を生かして、何でも話せる関係を高めることは、子どもの感性やコミュニケーション力を高める上で重要な発達機会となる。さらに加えて、フォーマルな話し方やコミュニケーション力が重要になる。馴れ合いの関係も克服して、合意形成を作る経験も増やしていく必要がある。このために、フォーマルな発言・発表のコミュニケーション機会を拡大することが重要になる。

フォーマルなコミュニケーションを拡大するために、日常的には、以心伝心でわかり合う少人数の間でも、TPOに応じてフォーマルに使い分けることが重要である。フォーマルなコミュニケーションの主な場面としては、授業時間・朝と帰りの時間・学習発表の時間・学校行事等での挨拶の時間がある。

【授業時間】第1に、授業時間と遊び時間の区別を意識させる。授業中の討論・発表でも、意識的に個々の子どもが発言・発表・説明できる時間を設定する。単元のまとめを行う発表会などを設定しても良い。構成員が3人等の少人数であっても、フォーマルに構成員に呼びかけさせる。これにより、少人数でもTPOを踏まえ、大人数と同じ行動様式を意識することが重要である。

【朝と帰りの時間】第2に、朝の会・帰りの会等の係からの呼びかけや、テーマを決めた1分間スピーチ、学級会での発言等の機会を多く設定する。授業内容の発表では、ある程度表現内容は異なっても正解が大きく異なることはないが、自由なスピーチでは、内容・展開を自分で構成する必要がある、子どもにとってのフォーマルなコミュニケーションとしては、重要な経験となる。

【学習発表の時間】第3に、頻繁に学習公開発表会や参観日を設けて保護者・祖父母・地域住民に見てもらう機会を増やす。普段の人間関係と異なる場合には、コミュニケーションスタイルもフォーマルにならざるを得ない。時には、発表場所を公民館などに変更することで、地域発表会としてフォーマルな雰囲気や緊張感をつくる（注4）。

【学校行事等での挨拶の時間】第4には、運動会・文化祭などの学校行事において、挨拶する機会を与えていく。人数が少ないので、全校集会では上級生はほぼ全員何らかの挨拶の機会を作ることができる。また低中学年も、それぞれの学級活動・学級行事等で挨拶の機会を作ることができる。

これらの4つのフォーマルな発言・発表機会が、フォーマルな場とそれ以外の場のTPOを意識させることになる。

2. 討論方法の共有と運用における柔軟活用

(1) 司会・討論の基礎的運営方法の必要性和議制理念の浸透

少人数で分かり合える関係の中では、司会者を立てなくても、討論を進められる。少人数では全員発言と全員の集団思考が自然にできるからである。一方人数が多くなると、発言する人としらない人に分かれたり、意見が極端に分かれたりするため、異論・提案の相違を調整する司会者が必要になる。

元々異論・提案を含めた多様な意見の違いを調整することが合議制の理念であり、最初から一致していることや議論無しに統一化することは、合議制理念からすると目指すべき姿ではない。司会者は異論・提案を含めた多様な他者が合議するために必要であり、この司会を経験することで、

社会的な調整・調和のプロセスを会得できる。

合議制理念を実践する際に、元々司会等が上手な子どもは、司会運営マニュアルがなくても、ある程度アドリブで進めることができる。一方で上手ではない子どもを含めて、ある程度マニュアル化することで、全ての子どもが司会を担うことを挑戦できる。

さらに少人数の学級だと、司会がうまくいかなかったり、議論の途中で教師からアドバイスもできるし、周りの子ども達も暖かく見守ることができる。へき地・小規模校の学級であれば、教師は運営の修復や途中アドバイスもしやすい。そのため教師は全ての子どもに、最初はマニュアルを使いながらも、思いきって司会運営に挑戦させる必要がある。

むろん留意すべきことは、徐々に慣れてきたら、状況に応じて使うべきマニュアルを柔軟に選択しながら、段階的に自分の言葉で語ることである。マニュアル例文を読み上げるだけであれば、マニュアルが逆に討論方法を実践的に会得する条件を阻害する。

(2) 司会・討論の考え方の例示と運用における柔軟な活用

討論の仕方の中でも、特に異論を呈し、その調整を図る時の運営は難しくなる。少人数でも異論を含めた司会ができるようにするためには、異論をあえて出してもらった上で、それを調整する司会・討論方法の例示と経験が重要になる。例えば、「どちらの意見が良いと思いますか。」「それぞれの良い面と悪い面は何だと思いますか。」など相対化することなどである。その場合の例示は考え方を提示するもので、話し方や表現方法は例示通りではなく、各子ども自身の表現方法を尊重することが重要である。

司会・討論の考え方の例示としては、例えば以下のものがある。当然これらの考え方は、学年発達段階に応じて分かりやすい表現で伝える。またこれらの考え方は小規模校でも大規模校でも必要なものであるが、小規模校の場合はこれらの例示をさらに全員に体験的に進め易く、例示の提案をそのまま子どもの発達に繋げやすい。

司会・討論の考え方や提案の例示

- ① 日常的な人間関係の感情を持ち込まない
- ② 相手の立場や意見の意味を理解しようと努めてもらう
- ③ 相手の意見を尊重した上で、違う意見と理由を述べってもらう
- ④ 誰かの意見に依拠するのではなく、皆が考えるように提案する
- ⑤ 発言者以外にも「他の人の意見はどうですか」と全員に意見を求める
- ⑥ 必ず異論・反論の時間を作って、違う意見をあえて考えてもらう
- ⑦ 異論を含めた討論は、見方を広げられるメリットを皆で確認する
- ⑧ 異論は、相手の人格を否定するものではないことを確認する

- ⑨異論を呈すると、嫌われないかという遠慮を克服していく
- ⑩異論を呈する時の伝え方・表現方法を工夫してみる
- ⑪「思う」という主張だけでなく、思った理由・根拠を述べてもらう
- ⑫目指したいことを具体的にするための方法を皆で提案してみる
- ⑬具体的な方向性は、5W1Hなどを活用して行動を考えてみる
- ⑭別の状況の時には別の方法になることを想定してみる
- ⑮どちらか一方の意見に納まらない場合は、妥協案を探してみる
- ⑯皆が何となく納得できない場合には結論を急がないようにする
- ⑰目的・現状・課題・対策などに細かく分けて議論してみる
- ⑱結論が出ない時は、継続審議の終わり方も提案してみる

※例示は、筆者作

へき地・小規模校は、少人数のため司会運営は誰もが経験しやすい。上手下手はあっても、少しでも経験することが、将来の社会性・コミュニケーション力に関する資質・能力となる。少人数だと経験の場を多く作れるため、少人数のメリットを生かすことができる。

司会の例文は、子どもの学年発達段階に応じて例文を活用して慣れるようにする。例えば、異なる意見を出し合うための例文として、「○○について色々な見方で話したいと思います」「ちがう意見を御願います」「他の意見も考えみましょう」「他の方はこれで良いですか」「意見が二つに分かれたので、今回はまとめを出さないで次回も議論しましょう」などの展開例文を具体的にいくつか用意し、状況に応じて自由に活用することで、長期的に社会性・自立性を培っていく。

3. 学級の役割分担の明確化と相互補完関係の発展

(1) 学級内の具体的な活動の発掘と役割分担・責任者の明確化

多様な個性を有する子ども集団において、全員が同じ役割を同じ程度にこなすことは不可能である。子ども集団の中でも多様な役割を徐々にこなしていく中で、多様な資質・能力を育成できる。そのためには、子ども達においても、学級内の具体的な活動を発掘し、その役割と権限を与え、責任者を明確にする。この責任者を明確にすることで、社会的な役割分担の中で責任感・遂行力および役割貢献度を高めることができる。

責任者を作ることは、責任者以外が責任を持たないことではない。責任者が責任を持ちつつ責任を相互に補完・協

力しあうことで、集団性が高まることも子ども達に理解してもらう。特に人数が限られた極小規模校の場合は、傍観者を作ることはできず、あらゆる人が責任者になったり、その構成員になったりする。そのため、この役割分担を明確にし、それを遂行するだけでも、社会的責任感や役割貢献度感を高めることができる。少人数のへき地校では、全員への役割分担と責任付与による責任感を意識的に高めやすいことが利点である。

さらに教師がいないときでも、自分たちで学級の活動を考え、行動できるフローチャートや担うべき活動を例示し奨励すること、それを自分たちのアイデアで改善することを奨励していく。これにより自立的に学級を運用する資質・能力を高めることができる。へき地・小規模校では、社会の縮図としての学級集団の運営の考え方などを意識的に教えていけば、社会性・自立性の資質・能力を身につけていくことができる。

(2) 複式学級内の役割分担と協働的な相互補完関係の推進

へき地校の複式学級では、異学年が一つの学級であるため、必ず上級生と下級生と一緒に行動する。その場合には、各学年のリーダー的役割とフォロワー的役割を意識させる。例えば3・4年生の複式であれば、3年生はフォロワーとして4年生のリーダーを支えるが、4年生になればリーダーとして3年生を牽引していく。さらに5年生になれば、再び6年生のフォロワーになっていく。このように複式学級では、リーダーとフォロワーの立場が交互に繰り返される。

リーダーとフォロワーの関係は、「リーダーが周りに呼びかける」「呼びかけられたら、周りのフォロワーはそれに応える」「リーダーの責任にせずに、一緒に協力してやる」というリーダーとフォロワーの責任と相互補完関係をすべてにおいて意識させる。これにより社会に出るまでの役割分担と協働的な補完の必要性を認識させる。

複式校では、全校集会の活動も多く、小さい学級のリーダー・フォロワーの関係から学校全体のリーダー・フォロワーの関係に発展させる。このような、小集団からより大集団へのリーダーシップ・フォロワーシップの必要性を自覚させるだけでも、社会的資質・能力を高めることができる。へき地・小規模校では、密接な人間関係の中で誰もがリーダーやフォロワーになり、建設的な互恵関係を作ることができるため、それを生かすことが重要である。

このように複式学級では、常にリーダー的役割とフォロワー的役割を交互に経験するが、この経験を意識的に社会の縮図としてリーダー的役割とフォロワー的役割の両方を自覚させていく。このような複式学級の両方の経験を基に、大組織・大集団内のリーダーシップとフォロワーシップの両方の必要性を実感的に理解させる。

(3) 学級内の日常日課活動の役割分担と主体的・自立的運用

学級内には、様々な役割があるが、子ども達が自立的に

学級集団づくりを進めるためには、教師がその都度子どもに指示を出すのではなく、学級の日課・役割・責任を子どもに付与する。特に日課に関しては、月番・週番等の限定期間を決めて交代しながら、誰もがその役割と責任を担うことで、誰もが学級の役割と責任を同様に分かち合う構成員となる。

例えば日直も、どの役割を日直が担うのかを明確にしておけば、子どもが主体的・自立的に学級の活動に関われる。これにより、教師の毎回指示する時間も省略でき、また教師不在中も自立的に学級を運営する習慣を作ることができる。

校内委員会内の役割や学級間の調整に関しても、担当人数が少なくても、役割を明確にすれば、自主的に学校を運営する意識も高まる。そのためには、委員会や学級内の日課に関しても、多様な役割を発掘し、役割分担を“見える化”する。活動内容と役割分担が決まっても、担当者任せではなく、さらに、周りの子ども達からの提案や点検的な呼びかけも促すことで、相互に補完的に行動できる。

そのような役割の発掘と分担方法に関しても、教師が一方的に提案するのではなく、子どもから多様な役割を提案してもらいながら、対応方法を自立的に決めさせる。これらにより、「自分たち自身による自立的な運営が大事だ」という、自覚と責任を常に意識させることが可能となる。学級の1日の日課の役割分担例としては、次のような内容がある。

学級の日課に関する役割分担例

- ①登校時の教室窓開閉当番、点灯当番
- ②朝昼夕の「職員打合せ」の時の学級自主活動
- ③朝読書の進め方・読み方
- ④朝の会・学級会の司会と進め方
- ⑤朝の会の内容の工夫・出番・発表・歌・健康チェック
- ⑥帰りの会の司会と内容（連絡・話・配り物・提出物確認等）
- ⑦授業開始と授業終了時の号令と挨拶方法
- ⑧「学習班」の約束と活動内容・学習リーダーの役割
- ⑨移動黒板の配置・討論等の席の位置
- ⑩座席配置の方法と決め方、席替えのルール
- ⑪黒板整備役と黒板の自主的活用のルール
- ⑫特別教室への移動の仕方・事前準備・片付け
- ⑬給食当番と役割・交代方法の決定方法、
- ⑭「いただきます」「ごちそうさま」の号令
- ⑮自学自習時の内容と進め方
- ⑯学習配布物の配布・バインダー蓄積・点検方法
- ⑰ノート・家庭学習帳等の収集・返却
- ⑱学級通信・学校通信の配布と内容確認
- ⑲掃除分担等の役割と分担の決め方
- ⑳係活動の活動時間と係活動内容
- ㉑係から学級構成員への提案・連絡の方法と係員の役割
- ㉒学級会の議題等の提案方法と議題の整理方法

- ㉓司会順番と記録方法と決定方法に関する確認
- ㉔児童会・校内委員会の活動内容との関連性
- ㉕家庭学習の仕方と自分自身の実行計画
- ㉖休んだ子どもへの連絡・プリント配布の方法
- ㉗休み時間等のけが等の問題発生の連絡方法と危機管理
- ㉘帰り時の整理整頓・消灯・確認事項連絡等
- ㉙生活点検表の提出・回収・返却とふり返り
- ㉚担任不在時の教師から子ども全員への指示方法と行動
- ㉛学級係・学級委員・日直の役割の新設提案
- ㉜学習発表会の運営計画
- ㉝年間行事計画に沿った学芸会・フェスティバル等の運営企画

※例示は筆者作成

このような具体的な学級の日課・役割を例示しながらも、それらを最終的に決めるのは子ども達である。少人数であっても、日常的な学級の役割と生活習慣ルール・運営ルールを自ら実行することで、社会性・自立性を身につけさせる。へき地・小規模校では、教師の指示がストレートに子どもの中に浸透しやすいために、教師主導で運営が行われる傾向もあるが、逆に少人数であるために、意識的に子ども達に役割と権限を付与しながら、自立的に運営を企画することが可能である。へき地・小規模校では教師の目も行き届くゆえに、自立的に行動させて問題があってもすぐに修正しやすく、自立的に運営しても問題になることはない。

4. 学級の組織活動におけるルールづくりと活動目標の明確化

(1) 学級の組織活動におけるルールづくりと補完的・協動的な関係づくり

各担当者は、個々人ではなく、複数名の担当者を主担当・副担当の組織にすると、組織的な行動ができやすい。学級人数が極めて少ない場合は、細かく個々人に役割分担を分けるよりも、複数の役割を複数人で担当する方が、グループ内の相互補完ができる。複式学級においても、学年差があっても相互に補完しながら臨機応変に対応できる。これらの臨機応変の対応が実質的な協働性を発揮させる基盤となる。

また、学級や委員会内の役割分担を決めて自立的に動くと同時に、少人数であってもそのグループ内での討論方法や意思決定の方法を確認しておく、グループ内の公平・平等な運営とコミュニケーションを促進できる。この点をグループ内で話し合うとともに、その目標をグループ内で立てることで、より意識的に行動できる。グループ構成員が補完し合うように、役割分担と協働性を発揮すること、また行動しない人を引っぱる方法について、グループの話し合いと自己目標・自己管理ルールを自分たちで作らせていく。

学級会の討論では、学級会議の司会・提案・発表方法・

役割分担・報告等のルールを自分たちで明記することで組織的な運営方法を心がけることができる。これらの討論方法の経験は、少人数であっても、あらゆる子どもの社会性・自立性を長期的に高める条件となる。

(2) 能力差を前提とした集団活動のルールづくりと活動目標作成

極少数のグループであっても「集団活動ルール・10か条(例)」等を自分たちで作って時々確認させると、グループのフォーマル・インフォーマルの行動を区別できる。学級内の集団の話し合い・活動・関係のあり方の自主ルールの目標例としては次の様な例が挙げられる。

学級の集団活動の自主ルール例

- ①グループに自ら溶け込もうとする
- ②グループに溶け込むように誘いあう
- ③話し合いを人任せにしないように心がける
- ④相手の意見は最後までしっかり聞こうとする
- ⑤意見が出ない時にも、できるだけ意見を述べようとする
- ⑥誰に対しても優れた意見には共感・賛成を表明する
- ⑦話し合いが楽しくなるように自らも盛り上げようとする
- ⑧つまらなさそうな表情ではなく、笑顔でみんなと接する
- ⑨言にくいことでも、自分の意見を語るようにする
- ⑩話題がそれたときに本題に戻そうとする
- ⑪できない人には自分からアドバイスする
- ⑫やる事が決まったら役割分担を決める
- ⑬やるべき作業に積極的に取り組もうとする
- ⑭行動しない人にもきちんと誘う
- ⑮各自の案や資料をそれぞれが用意する
- ⑯約束時に来ない人がいた時の対応方法を確認する
- ⑰目標・ルールを決めたら、自分で守ろうと努める

※例示は筆者作成

グループ構成員には、小規模集団でも大規模集団でも必ず個人差・能力差・年齢差が生じるが、それらを協働的に補完し合うことを目標として、ルールを自主的に作る。例えば、できる子とできない子の最低限の共有活動、できる子による支援、できない子の姿勢、等の自主ルールを作ることを継続的に意識することで、極小規模校でも長期的に高い社会性・自立性を養成できる。

5. 縦割り協働活動の拡充とリーダーシップ・フォロワーシップの育成

(1) 異学年間のリーダー・フォロワーの互惠関係による学級理念の構築

現代の子ども達の人間関係は、地域の異年齢集団もなく

なり、同級生のみと付き合う一方で、異年齢・異世代の人との交流経験が少ない。一方複式学級をはじめへき地・小規模校は、異学年の縦割り協働活動が日常的に行われることが特徴である。さらに保育所・小学校・中学校と地域住民との合同行事・公共活動・地域祭・奉仕活動などの交流もあり、異世代間の交流が日常的に行われている。この異学年・異世代との交流は、学校教育を終えて社会集団に出たときには極めて貴重な社会経験となる。

また集団が徐々に大きくなれば、必ずリーダーも必要になるが、学校における全校活動などの異学年縦割り集団は、上級生としてのプライドとリーダーとしての振る舞いを意識させる重要な機会となる。同級生だけの少数数であると、馴れ合いにもなるが、異学年集団では、上級生は全体のリーダー的な役割を果たすことを意識する。上級生は全体の調和を図りながら、下級生に対して指示・補完・保護・支援もしなければならない。

一方の下級生は、上級生から指示される立場でもあるが、上級生の指示を具体的に支援するなどフォロワーの立場でもある。下級生は上級生に妥協・従属しながらも、上級生に教えてもらいながら、上級生の高い能力を尊敬し、目指すべき行動を模倣学習するという関係にある。したがって、フォーマルな関係において、異学年集団はリーダーとフォロワーの関係にあり、社会集団の異年齢関係の小規模版を経験できる。

このようにへき地・小規模校は、社会集団としての異年齢集団を子どもの時から経験でき、子ども達に異年齢・異能力の人たちと交流できる経験を積極面として意識させる。

(2) へき地・小規模校での異質性・異能力を意識したリーダーシップ・フォロワーシップの意識づけ

へき地・小規模校の異学年集団は、リーダー・フォロワーの関係であるが、この関係を意識的にリーダーシップとフォロワーシップ(注5)の資質として意識させる。リーダーはリーダーシップを期待されるが、リーダーだけでリーダーシップを発揮できるわけではなく、フォロワーがフォロワーシップを協働的に発揮することでリーダーもリーダーシップを効果的に発揮し、集団的な効果を高めることができる(注6)。

特にへき地・小規模校では、特定行事だけでなく、日常的な関係の中で異年齢集団が構成されているため、複式学級や全校集会など、長い年月をかけて、リーダーとフォロワーの両方の立場を交互に経験する。この関係を意識することで、リーダーシップとフォロワーシップの両方の資質を伸ばしていく。

特にフォロワーシップは、リーダーに任せきりにもせず、リーダーの不足分を協働的に補完するなど、異能力と発達段階の個性を持つ集団がより効果的に資質・能力を発揮する上で重要な要素となる。近年の集団づくりにおいてリーダーシップに加えてフォロワーシップは、極めて重要な集団構成条件となる。へき地・小規模校では、異年齢・異能

力を受け入れる寛容性と異学年の能力差に応じた役割分担と異学年協業を作り、リーダーシップとフォロワーシップの両方を育成する条件を意識づけできる。

おわりにーへき地小規模校の自立的な学級集団づくりと社会性・自立性の育成

以上へき地・小規模校の学級集団づくりにおいて、とりわけ社会性・自立性を発展させる学級集団づくりの観点をとらえてきた。これまでへき地・小規模校では、少人数の中で協働的な関係は非常に強いが、馴れ合いや教師への依存傾向があることも指摘されてきた。そのためへき地・小規模校では、馴れ合い・教師への依存傾向を克服する学級集団づくり指導も重要となる。学級集団づくりの目指すべき理念は、大規模校もへき地・小規模校も同じであるが、とりわけ重点の置き方としては、へき地・小規模校では社会性・自立性を高めることを重視する。

このために、①コミュニケーション機会の拡充、②討論方法の共有、③役割分担の明確化、④ルールづくり、⑤縦割り協働活動の推進、の5点をとらえてきた。これらは実は、社会集団の人間関係づくりの中核要素となるもので、これらの観点を意識することで、極小規模の強みを活かした学級集団づくりを高められる。

へき地・小規模校は、少人数であるため、誰もがリーダー・フォロワーの役割や責任を担える。また少人数の信頼関係を基盤にするため、形式的な討論を超えて、異論・提案を含めた討論方法を採用入れることが容易である。集団づくりも状況に応じてグループの運営方法や目標を自分たちで工夫することで、馴れ合いを克服した自主的な集団活動を進めやすい。また少人数の関係だからこそ、リーダーシップとフォロワーシップの組織の協働的な立場を、失敗を恐れずに伸ばすことができる。これらの集団づくりの観点は、多様な他者を含めた集団の人間関係づくりを意識すること、またTPOを踏まえた学級集団づくりを意識することで、協働的な学びを推進する。さらに社会性・自立性を伸ばす学級集団づくりの方向性をへき地・小規模校で確認することで、各学級もそれを意識した学級づくりを進められる。

このように学級内の役割と責任を付与し、集団づくりを意識的に追求すれば、へき地・小規模校の馴れ合いや教師依存傾向を克服し、極少人数の協働性の良さを活かしつつ、社会性・自立性を高める学級集団づくりを進められる。

注記

- 注1. 深見智一著『単学級担任・複式学級担任の学級経営ーへき地・小規模校での実践事例を中心に』ふくろう出版、2018年
- 注2. 全国へき地教育研究連盟編『効率的な学習指導と学校・学級経営ーへき地・小規模・複式学級を有する学校の実践的事例』全国へき地教育研究連盟、1999年
- 注3. 宮本聡介・太田信夫編著『単純接触効果研究の最前線』北大路書房、2008年
- 注4. 様々な地域と連携した発表や行事企画の効果については、玉井康之著『学校評価時代の地域学校運営ーパートナーシップを高める実践方策』教育開発研究所、2008年、参照されたい。
- 注5. 近年リーダーシップと共に、フォロワーシップの役割も再評価されつつある。松山一紀著『次世代型組織へのフォロワーシップ論:リーダーシップ主義からの脱却』ミネルヴァ書房、2018年
- 注6. リーダーシップとフォロワーシップを学校経営に採り入れた実践として、北海道教育大学附属釧路義務教育学校編著『「令和の日本型学校教育」への挑戦ー小・中一貫した義務教育を構築するカリキュラム・マネジメント』教育出版、2022年、がある。

